

尹東柱の足跡を訪ねるまちあるきツアー、第2回目開催レポート

2月14日のまちあるきは、尹東柱詩人の命日(2月16日)に合わせて、追悼式への参加という形で行いました。

私たち尹東柱の詩を読む会が中心となって、毎年ささやかな追悼式を行っているのですが、うれしいことに今年は参加者22人のうち、半数が会員ではない人たち。

ヨンさまが大好きで、韓国のことを学び始めた人。

韓国の民族衣装を着て、ボランティアで尹東柱の詩を朗読している人。

尹東柱のことをもっと知りたいと、遠路はるばる京都と広島から来た人。

毎年欠かさず参加してくれる人。

初めて来た人。

…いろいろな人が集いました。



1940年ごろの尹東柱。

なかなかのイケメンでしょう。

現在の延世大学出身です。

実は、この顔立ちにひかれる女性も多いのです。

死ぬ日まで空を仰ぎ／一点の恥辱(はじ)なきことを、／葉あいこそよぐ風にも／わたしは心痛んだ。／星をうたう心で／生きとし生けるものをいとおしまねば／そしてわたしに与えられた道を／歩みゆかねば。／／今宵も星が風に吹き晒される。

これは代表作の「序詩」。

清らかで美しい調べの中に凜とした力強さを感じませんか。

かと思えば、

こおろぎとわたしと／芝生で話をした。／／リリリ ルルル／リリリ ルルル／／誰にも教えてやらないで／ないしょの約束をした。／／リリリ ルルル／リリリ ルルル／こおろぎとわたしと／月の明るい晩に話をした。(こおろぎとわたしと)

というように、心優しい童謡詩人でもあるのです。



彼が留学生生活を送った東京と京都でも、追悼式が行われていますが、尹東柱の写真に全員で花を捧げ、各自が好きな詩を朗読。彼が口ずさんだという黒人霊歌を合唱するのが福岡スタイル。

交流会では、自己紹介のつもりが、詩人への思いを皆熱く語り出して、あっという間に3時間が過ぎてしまいました。

尹東柱がこの世を去って 65 年。

福岡は彼の命を奪った悲しみの地ですが、彼の詩と精神は今も生き続けていることを改めて実感します。

1984 年に出版された日本語の訳詩集「空と風と星と詩～尹東柱全詩集」(影書房)は、隠れたベストセラーです。

また、最近では日本語と韓国語の詩が収録された朗読CDも発売されています。

尹東柱の世界にふれてみませんか。

次回は、2月 27 日(土)、3月 27 日(土)、4月 10 日(土)の開催です。

* 尹東柱とは…

尹東柱(1917～1945)は 韓国人ならだれもが知っている詩人。日本の植民地支配により、朝鮮民族が母国の言葉を奪われた時代に、ハングルで詩を書いたことが罪とされ、福岡刑務所で 27 年の生涯を終える。生前一冊の詩集も出すことはなかったが、彼の死後から3年後に友人らが遺稿詩集「空と風と星と詩」を出版。内省的で、祈りのように深い透明感と清らかさを持つ彼の詩は、日本語や英語、中国語、フランス語などにも翻訳されている。